バルザック評伝

第一部

若き日のバルザック (2)

金子　守

はしがき

バルザックとスタンダール，ふたりは作家という道を歩むことで，ある日，邂逅する運命にあるのだが，スタンダールは周知の如く，自己の墓誌銘に生きた，書いた，恋したとしるした。もしわれわれがペールラシエーズにあるバルザックの墓に墓誌銘をしるすとれば，それは，書いた，書いた，恋したとなるであろう。

筆者は先にと言っても執筆し始めた時期からすれば約20年も前になるが，『スタンダール伝』を書いた。その時，彼の作品については彼の生活の流れに浮ぶ小舟の気持で紹介していった。サント・ブーヴも言うようにスタンダールは文学の愛好家ではあってもプロではない。だが，バルザックはちがう。彼こそ文学だけで糊口を願った先駆者たちのひとりである。

従って，バルザックの人間像を明らかにしたい目的から，筆者は彼の生涯と作品とを交互に，それもできるだけ年代的に研究することにした。研究上，バルザックのあらゆる作品や文献にあたる必要があることはいうまでもないが，この評伝を執筆するに際しては，バルザックの小説について語るときには特にモーリス・バルデッシュの『小説家バルザック』によることにし，バルザックの生活について語るときには主としてアンドレ・ビリーの『バルザック伝』によることにした。

さらに，バルザックの習作と今日みなされている作品の説明も殆ど前者の解

説，研究によっていることを断っておきたい。しかしながら，すべてを両者の研究によったのではない。他の文献は終章で列記することにしたいと思う。

次に引用訳文のあとで括弧してアルファベットで，たとえば，Kとしるしたのは筆者の頭文字であるが，こうした引用文はできるだけ実証的なものに限りたいと思う。ただし，T.Sとあるのは東京創元社のバルザック全集よりの引用であり，個人名ではない。なお，引用原典と参考文献は後記としてあげることにする。

（目次）

第一章　バルザックの少年時代
——（岐阜経済大学論集，第11巻第3号に掲載）
第二章　屋根裏部屋のバルザック
——（本号に掲載）
第三章　バルザックとベルニー夫人
第四章　机上の実業家バルザック
第五章　バルザックと『ふくろう党』
第六章　バルザックとカストリー公爵夫人
第七章　バルザックとハンスカ伯爵夫人

第二章　屋根裏部屋のバルザック

バルザックはなにかと烟たい両親と別れて，レディギエール街の９番地にある恰も鳩小屋のような屋根裏部屋にどうにか移り住むこととなった。1819年８月４日のことである。

われわれが周知の小説『ゴリオ爺さん』のヴォーケ館として登場する下宿屋に着くと，コマンおばさんが彼を迎えてくれた。彼女，ペルチエ夫人はかつてバルザック家で20有余年も女中をしていたが，数年前からこの下宿屋の女中となっていたという。従って，彼女は昔の主人から頼まれて，また坊ちゃんの面倒をみることとなったのである。数日後，バルザックは早速コマンおばさんにタオルを１枚買ってきて欲しいと頼んでいる。

実はこの下宿でのバルザックの生活は物質的には極端に切りつめた貧しいものとなった。しかし，彼には限りなく広がる夢があり，自ら選択した文壇へ通じる道がいつかは文学の世界に君臨する王者の席に彼を導く筈だった。その夢が日常の辛さを忘れさせたのである。バルザックは恰も冬眠中の熊の如く地下ならぬ屋根裏にもぐり込み，食物の調達や急用でもない限り，滅多に外に姿を見せることはなかった。

とにかく，彼にとって無為にときをすごすことは，両親と約束した日数を思うと，損をする気がしたであろうし，それに外出しても，彼には自由に使うお金がまったくなかった。それでも辛抱できなくなり，カフェに行きたいと思い，部屋中を隈なく捜してみるものの，１杯分のコーヒーさえ飲むお金は見当らない。あのラファエルのように，気を利かして机の上にお金をそっとおいてくれるポーリーヌはバルザックにはいない。

後年，彼はある作品でこの下宿時代を回想した文章で，

「僕は水ばかり飲んでいた。だから僕はコーヒーに対しては実に大きな尊敬を払っていたものだった。」

と，書きこんでいる。われわれはバルザックにまつわるコーヒー神話の誕生を見る思いがしよう。

そこで徒労と知りつつ，書き損じた原稿用紙に計算をくりかえす。今日も朝から数えて幾度目か，

えーと，パン代が3スウ，ミルク代が2スウ，まあ，これだけあれば1日の食費はなんとかたりて餓死することはあるまい。昔から言われているように，腹一杯よりは八分の方が，頭が冴えているような気がする。それに満腹ではねむたくなる。この鳩小屋代が日割で3スウになり，ひと晩に3スウの割で油を燃し，洗濯代を1日に2スウで抑えるためには，お母さんが私に注意していたように，フランネルのシャツを着るとしよう。それにはもう2，3枚家から取りよせておく必要がある。手紙に忘れないように書かなければ。

それから，そうだ，あと2，3ケ月もすれば寒くなるが，石炭で暖をとってもたいした出費にはなるまい。第一，少しくらい寒い方が嫌なシラミも南京虫もわかないからなあ。

とにかくこれで1日の生活費の合計が20スウになる勘定だ，これ以上は使えない。あの母さんがくれっこない。いたってけちだからなあ，幾ら使ったかきちんと報告なさいという母さんだからなあ，そうだ，水は広場に噴水があるから汲んでくるとしよう。それにしてもパリの夏は，屋根裏の夏は暑い，たまらない。

バルザックは引越しに続く数日，部屋中を白い新品の壁紙で張りかえ，書棚や煖炉も白く塗ったりしてすごしていた。そして，仕事に疲れると，手をやすめて，ほんの申しわけについている明りとりの小窓からパリの屋根を眺める。その赤いスレート瓦はすっかりくすんで時の着物を感じさせ，よく見てみると，生命力ある苔類がへばりついている。瓦のしみのようなそれは雨の降った翌朝には陽をあびて鮮やかなビロードを思わせる褐色に変貌している。

なんという生物だろう。バルザックは苔と言えば石積の陽のあたらない場所で生えているのを見たり，あるいはロワール河原の朽木に生えているのを見た

記憶しかなかった。彼はその後この植物の友となる。すなわち，彼は仕事に疲れると，あきることなく苔を観察するようになっていったのだ。この不思議な生命力は作家バルザックに約10年後『あら皮』を着想させることになるのであろうか，苔は春や夏には生活の場を大きく広げるのである。

またときとすると，彼と同じく屋根裏の住人たちが小窓を通じて眺められることがあった。それも洗濯物がほしてある隙間から。男だろうか，女だろうか，若いのだろうか，それとももう死を待つ老人だろうかと彼は空想をたくましくする。けれども，屋根裏に住む女じゃ自分の相手じゃないとラファエルにつぶやかせることになるセリフを口にしてみる。イタリア座の桟敷で見かけることができるとかいう婦人たちでなくちゃと思うのだった。

バルザックは下宿生活になれてくると，人生で下宿を体験した者なら誰にも身に覚えのあるものだが，彼もヴィルパリジの家族に第一報をはやばやと送っている。ただ，彼の場合も通信相手がスタンダールと同じく妹ロールになるのだ。それも，両親宛に直接手紙を書く際に感じるてれかくしばかりでなく，特に小うるさい母親を敬遠したい気持から，もっぱら妹ロールに手紙を出すようになる。手紙の件になると，バルザックの脳裏にはヴァンドーム時代の母親の仕打ちが甦る。どうせ返事をくれたとしても叱言だ。

8月12日，彼は私の引越しや生活について，あんたが詳しく知りたいだろうから，お知らせしようなどという勿体振った書きだしで，たいした内容もない手紙をロール宛に投函している。例えば，大ニュースであると称して，たわいもないことを記している。

《君にはまさかと思えるような大ニュースがあるから，君だけに教える。僕は未だ砂糖壷を開けてないんだ。子供っぽい事を言ってるけど，でもどう思う。僕はよく考えた手紙を書いてる訳じゃない。僕は気の向く儘に書いてるんだから取り留めのない事を言っても驚かないでおくれ。ついでに，手紙はヴィルパリジ宛にする。

紙の半分だけに，悪いペンで書いたり，とりわけ馬鹿なことを言ったりして

も驚かないで。出費を見直して，する事全部について倹約しなくちゃならない。書く文字迄ね。それで御覧の通り。》(T. S)

ところで，実はこの手紙の前半に，われわれがバルザックを未来の作家として見るとき，たいへん興味をひく文章が認められる。それは，彼が対話形式で自己の日常を語っているからで，ここに作家となる願いをこめたバルザックの意図を汲むことはわれわれの読みすぎとなりかねないとしても，少なくとも対話がすらすらと書ける事実は作家としての資質にかかわることから，注目に価しよう。バルザックはモワ・メームなる召使を創造し，日常生活ぶりを彼との対話で妹ロールに報告している。こんなやりとりで，

《「モワ・メーム」

「何でございましょう」

「昨夜虫に食われたぞ。南京虫がいないか見てみろ」

「南京虫など全然おりません」

「よろしい」

彼は掃除を始める。でもあんまり上手じゃない……》(T. S)

こうした手紙は，バルザックが家族とはなれてひとり暮らすこととなった淋しさをまぎらわしている証拠であろうが，孤独な生活を送っている彼の屋根裏へも激励に訪れてくれるひとが2，3人いた。

そのひとりは母方の祖母サランビエ夫人で，孫オノレの体を心配してときどき彼の様子を見に来るのだった。バルザックは妹ロール宛の手紙で祖母が持ってきてくれた豚肉はたいへんうまかったと報告している。

いまひとりは，バルザックが馴々しくダブラン小父さんと呼んでいた人物で，テオドール・ダブランという金物商人であった。ダブランはバルザック家の友人で彼の両親から頼まれて，なにかとバルザックの世話をみていたのである。それに彼は文学に深い趣味を持っていたらしく，パリの演劇界にたいへん通じていて，テアトル・フランセの常連であり，当時の演劇ファンが皆そうであった如く，ダルマやマルス嬢の熱心なファンであったという。

ある日，ダブランはバルザックが籠城している屋根裏部屋に通じるざらざらした階段をせかせかとあがってくると，相変らず何もしないで放心している彼の姿を認めた。そこで，ダブランはイギリスのクロンウェルを題材にしたらと忠告してみた。

実のところ，バルザックは作家になりたいなどと宣言してみたものの何をテーマにして執筆にとりかかったものか迷っていた。彼は粗筋を組立てようと，思いついたことを原稿用紙に数枚書いてみる。そして，このプランはモリエール流だと思う。だが，しばらくすると，これはむしろコルネーユやラシーヌの悲劇にぴったりだと思う。けれども，1日2日すぎると自信を失くして自問自答する。それで結局はものにならないことになる。いや，やはり，『ふたりの哲学者』を執筆してやろう。これも始めのうちは，喜劇のつもりで創作していた筈なのに途中でおかしくなる。それで，この喜劇も前のものと同じく題名で終わる運命になる。

そこで，バルザックは反省する。ドラマ性の少なくてすむ方が自分に向いているのかも知れん。となると小説だ。妹ロール宛の手紙からこの小説の題名が『コクシュグリュ』ということはわれわれにも明らかになっているが，これも書かれざる作品となる。つまり，彼の力ではとうてい歯がたつ代物でなかったと報告している。

「そうだ，ダブラン小父さんのクロンウェルをものにしてみよう。小父さんの話だと，上手に書けたらきっとあたると言っていたし，それになんとかものに出来そうな気がする。」

事実，クロンウェルという題材の選択は悪くなかった。フランス文学を学んだ者なら誰もが周知の如く，やがて，バルザックの友人となるヴィクトル・ユゴーが8年後に同じ題材で見事にものにしている。

バルザックは学校時代には作文が上手で，文章を書くことではかなりの自信があったとしても，いきなり長文の満足が得られるものは，本人が思ったほど簡単に書けるわけがない。執筆するのだという気ばかりが先立ち，文字通りの

悪戦苦闘が毎日続く。気分転換のためにと，いまでは自身も認める癖となってしまったと言えるのだが，彼はせわしげに部屋のなかを熊のように歩きまわる。それが深夜ともなれば彼の階下に住む者は気になったことだろう。

それでも気分がすっきりしないとなると，さすがの彼も散歩にでる。その行先は鐚銭もいらない植物園や，彼自身もいつの日かその住民となるペール・ラシエーズであり，そこでラスチニャックの如く，立身出世を夢みて苛立ちもおさまり，元気をとりもどすと，『クロンウェル』の待っている屋根裏に帰る。

だが，その時のバルザックはラスチニャックほど戦闘的なセリフをまだ吐きはしなかったであろう。分身であるラスチニャックのセリフはこうだ。

「さあ，今度はおれとお前（＝パリ）の勝負だ！」

やがて，バルザックがフランス文壇を，パリ社交界を知るにつれて，彼自身のセリフとなろう。

また，彼はときにはソルボンヌの方へ足を向けることもあり，気に入った公開講義や図書館へ出かけるためである。図書館では執筆中の『クロンウェル』の資料を捜しだすために英国史を丹念に読みあさっているバルザックの姿が眺められたことであろう。そして，下宿への戻り道にはいつもたちよる本屋でなにか創作の参考になるような本をときには買い求めたりした。

あるとき，前からもう一度読みたかったフランソワ・ラブレェの『パンタグリュエル物語』を見つけると，明日の生活のことも忘れて買いこんでしまった。それらの本代をうかすために，バルザックは貴重な食費を節約しなければならなくなり，お腹は水でガボガボと音がする。だが，そのうちに水腹で飢えをしのばずにすむようになった。というのも見かねたなじみのパン屋が，残りもののパンを半値で売ってくれるようになったからで，かたいパンをミルクづけにして食べるのである。

バルザックは『無神論者のミサ』のなかで，この時期の苦しい生活ぶりを涙とともにこのように回想している。

ときどき，ダブランが彼を激励にやってくる。自分がすすめたクロンウェル

を書く気になってくれたのが嬉しかったのだ。

耳をすますと，今日はいつもの如くせわしげに階段を登ってくる足音がする。やがてたてつけの悪いドアの開く音と，ダブランが商人らしからぬ調子でバルザックに尋ねる声とが聞かれる。

「どこまで進んだ」

すると，バルザックも調子をあわせて素直に答えている。

「今日はここまで書きましたから，あとひと息で，第一幕は出来あがりますよ」

「じゃ，今夜から第二幕にかかれるね」

「そうですよ，小父さん」

バルザックはダブランにどれほど感謝してもたりないくらいの面倒をかけていたのだから，嫌な顔を彼に見せるべきではないのに時とすると，虫の居どころが悪かったのかそっけないそぶりを示した。それはダブランが両親のスパイじゃないかと疑っていたからである。事実，ある意味ではその通りだったが。

われわれが眺めているようにバルザックは切りつめた生活を余儀なくされていたから，ほんとはダブランがときどき両手にかかえて運んでくれる食物はどんなにありがたかったことか。その証拠に，1829年に『ふくろう党』を出版した際の献辞は作品の取材のためにあんなに面倒を見てもらったポムルール男爵夫妻ではなく，このテオドール・ダブランに捧げられている。

ともあれ，バルザックはしまり屋の母をひどく恨んでいた。もっとお金をくれればこんなひもじい思いをしなくてすむのにと幾度も思ったからである。しかし，両親の方では息子オノレに作家志望を断念させる，それが作戦だったのである。どん底生活をさせておけば，作家になるなどという夢をあきらめて，公証人になってくれるだろうという戦略だった。この当時のバルザック家の経済状態は息子にひもじい思いをさせるほどの貧乏ではなかったらしい。

1847年に，バルザックの母が彼に出した手紙にバルザック家の財産状態が報告されているが，それによると，バルザックの父は職にこそありついていたものの，財産は零に等しかったようであり，バルザックの母は彼との結婚に際し

て実家から持参金としてシャルトル地方の農場を貰い，彼の許に嫁いだのだが，彼は妻のその農場を12，3万フランで売り，その金で聖ラザールの農場とツールの邸を購入し，パリに出るまで，そこでバルザックの一家は暮らした。多分，パリに出てまもない頃に，農場を7万フランで邸を9万フランで売ったようである。

その頃，バルザックの母は両親や叔母から別口の財産として合計10万フランを譲り受けていたから，バルザック家の資産は総計26万フランくらいになっていた。

母方の両親サランビエ夫妻は娘を嫁がせる際にバルザックの父の金銭感覚をみこんで娘を彼と結婚させた筈だったが，それほどの才覚がなかったのか，サランビエ夫人がバルザックの父に預けた4万フランを，彼の父は投機や相場に投資してすっかりすってしまい，やむなく祖母に2000フランの年金を支払う破目になるが，実際にお金を出す代りに一緒に住む条件で棒引きにして貰うことにした。

次にこの手紙でバルザックの母は息子にあなたの父は財産らしいものがなく，あり金は一種の年金ではあるが，生存競争を条件とするような終身年金契約のラファルジュ講につぎこむので，家庭はいつも赤字すれすれであったと訴え，そのラファルジュ講とて結婚して20年間は僅かばかりのお金の配当しかなく，あなたの父が亡くなった年の2年前に6000フラン，前年に9000フランの配当があっただけであると告げている。バルザックの父が長寿法の研究を熱心にしていたこともわれわれには納得がいくというもの。

さらにバルザックの母はこの26万フランがその後どうなったかを明らかにしている。それによると10万フランを3人の子供たちの持参金や結婚費用に使い，あなたの父や私が投機や相場で損をした額が9万5000フランあり，あなたに貸したのが4万フランで合計23万5000フランになり，残金の2万5000フランはあなたの父がパリの陸軍第一経理部長に転出した際に家政のために使ってしまったと告げている。そして年俸は1万2000フランの約束だったのに実際はそ

れだけ貰えなかったので，一家７人の家計を支えるのはたいへんだったとも告げている。

バルザック家のこうした家計の収支をみると，パリで暮らしている息子に贅沢をさせるような余裕はなかったと考えられるが，それにしても，バルザックが彼の友人の目には乞食にみえるほどの姿をしていたというから，家の者が彼にお金を充分に持たせなかったのは事実だったのであろう。

その友人ジュール・ペティニイはこの頃のバルザックに２度会い，次の如き証言をわれわれに残している。

《この頃から，バルザックはとりわけ醜さが目立ち，慧明に輝いた小さな目をぎょろつかせていた。横肥りで，丈が低く，房々とした頭髪をバラバラにしていた。顔はひどく骨ばっていて，口は大きく，いくつか歯が欠けていた。打見たところ，その身装はたいへん貧乏臭かった。》(W)

それから半年がすぎたある日，ジュールはパリのとある街路で偶然またバルザックに会った。

《何時もはつやつやした顔をしているのに，この時のオノレは大変蒼ざめ，つかれ果てていた。目はひどく凹み，不精ひげをもやもやと生やしていて，だらしなく着物を身につけていた。恰も病院か，でなければ，伝奇劇から抜け出て来たかのようだった。》(W)

ともかく，家の者は余分のお金を息子オノレにわたすまいとしたことは確かであろうが，実はもっとひどい話も残っている。バルザックの父の友人にオーギュスト・フエッサアルという人物がいたが，丁度，この時期に彼はバルザック家と親しく交際していて，バルザックの母が幾度もオノレを餓死させてやるのだと言っていたという。

だからバルザックもだんだん意地になっていった。だが，どうしてバルザックが母親からこんなにつらくあたられても作家志願を断念しなかったのか。単なる夢ばかりをみていたわけではあるまい。なにかより具体的な根拠があってのことであろう。そして，それは多分ダブランから大当りの劇作がものにでき

たら，まとまった大金が手に入るし，一夜にして有名になると聞かされていたせいだろうと思われる。

われわれはその具体的な根拠を示したいと思う。アンドレ・モロワに『ヴィクトル・ユゴー』という評伝があるが，その一節に，

《当時は文学で名声と金を得ようとすれば，一番の近道は劇作であった。1回2000フランで上演回数50回におよぶと，総計10万フランの「あがり」になる。このうち作者の手には1万2000フランがはいるが，作品を印刷すれば，さらに5000フランの収入がある。(『エルナニ』は第3版までに1万5000フランの収益があった。) これにくらべると，『ノートル＝ダム・ド・パリ』の印税はその4分の1にしかならなかった……》(T et Y)

と書かれている。

ある日，いつもの如く仕事に疲れて散歩に出たおり，バルザックは妹ロール宛の1通の手紙を投函している。彼は自分が現在おかれている立場をよくわきまえていると弁解じみたことをしるし，妹ロールに捧げる詩を10行くらい記しているのであるが，その続きに問題の『クロンウェル』について次のように語っている。

《僕は結局の所，『クロンウェル』(チャールズ一世の死) にテーマを決めた。もう6ケ月近くその構想を練って，何とか目鼻がついた。困った事に，韻文にするのに，少なくとも，7，8カ月はかかるし，その上推敲しなくちゃならない。

第一幕の主な構想は，もう書きとめてあるし，幾つかの詩句も書き散らしてあるけれど，僕の最初の記念碑を建ててしまう迄には，7，8回も両手の爪を噛まなきゃならない（こういう創作の中に充満している難しさが，君に解ったらねえ)。あの大ラシーヌさえ，『フェードル』を推敲するのに2年かけた事を知るだけで十分だろう。詩人達には絶望的な話だ。2年だよ2年。考えても御覧，2年だよ。》(T. S)

バルザックのこうした泣言は，彼が両親と約束していた2ケ年という短い期

限の重みをどんなにか強く感じていたのかをよくあらわしているし，あわよくば妹ロールの口を通して，両親にもう少し期限を延長して欲しいと訴えたかったのであろうと思われる。

バルザックは日付が9月とあるだけの第3報をロールに送っている。彼が冒頭で『クロンウェル』の進み具合について語っているのが先ず読める。

《僕は，はっきり『クロンウェル』について方針を決めた。今やすべて撤退不可能な迄に決定しているのだから，断固として，これ迄にないやり方で，取り組む積りだ。5，6ケ月うちには，大雑把にだけれど，終わり迄行くはず，一度輪郭を描いてから，好きなように色を塗りたいと思うから。おそらく9月末か10月初めには第一幕を送ってあげられる。》(T. S)

そして，バルザックは妹ロールに『クロンウェル』について自由に意見を述べて欲しいと虫のいい頼みごとをし，続いて，自己の将来を夢想している。

《我が国の革命は未だ終了していないし，そのあたりの事柄はまだまだ波乱を呼びそうだと思う。代議制度は偉大な才能を必要とするし，選挙民は騙された儘ではいない。僕は文学者は政治的危機に於いて最も求められる人士である，何故なら彼等は科学と知識に洞察力をあわせ持ち，人情を知っていると思われるからだ，と指摘したい。という訳で，もし僕が，男のなかの男なら（これは未だ解らないことだが），文学的栄光以外にも手に入れられるものがある。偉大な人物，偉大な市民たることは素晴らしいし，富が僕の心を引くのは，更に栄光を，善行を施し，周囲にある人達すべてを幸福にする時に得られる栄光を，手に入れる手段としてのみなのだ。》(T. S)

それで，バルザックは『クロンウェル』が成功し，富を獲得してくれることを願うわけだが，このように夢想するのは虫がよすぎるかしらと自身にも妹ロールにも問うている。

われわれはそこに若者の純な野心を眺めると同時に，富を再分配する思想に，王政復古が成立して数年がすぎているのにもかかわらず，また，バルザック自身があの革命の体験者でなかったのにかかわらず，革命時代の影響を認め

るのは穿ちすぎることになるのだろうか。

バルザックは自己の将来における理想像をこのように描いたあとで，ふと現実に戻ってゆく。

《所で，少し前に君に献じた出来損いの詩句の中に，可成りひどい間違いがある。それは思い出せる限りでは第一行目で，「科学」と言う言葉を2音節にしたが，3音節ある。君のきれいな指の爪をかませてやりたいから，手を入れてみておくれ。直したのを僕に送って下さい。

僕はシャプラン風に韻文の独白を造ってみたんだけど，とてもよく出来たと思った。所が見直してみると，殆ど全部間違っていることが解った。何とまあがっかり。》(T. S)

このように，バルザックが韻文というものはどんな厄介な代物であるかを悟ったと思われる文章が読めるのであるが，彼自身が自覚している如く，後退して出直す時間がないからには，ただ前進あるのみで，9月，10月，11月と『クロンウェル』の粗筋作りに専念し，11月にはどうにか第五幕までの構想を練りあげることができた。

それで，早速妹ロールにまとめあげたばかりの粗筋を知らせているが，この手紙の日付は11月とあり，『クロンウェル』の構想と題されており，冒頭で劇作には三一致の法則があり，真実らしからぬものはまったくあってはならないから大変な仕事であると告白している。

バルザックの『クロンウェル』は第五幕まであり，各々がそれぞれ四場から六場までで構成されている。それで登場人物の主役は3人おり，クロンウェル，チャールズ一世，アンリエット王妃である。脇役群は，クロンウェル側で彼の婿であるアイアトン，それに，彼の同志でありながらも対立することになるフェアファックス。一方，チャールズ一世側でストラトフォード父子がいる。

劇はアンリエット王妃の登場で幕があき，ウェストミンスター寺院が舞台となる。

王妃はオランダに王子たちを避難させ，フランスでは救助を願い帰国したば

かりである。しかし，王妃はすでに王が牢獄にとらわれの身となっている状況を知らなかった。そこへ登場した王の陪臣であるストラトフォードから事実を知らされて驚愕する。

ところが，その場へクロンウェルとアイアトンが姿を見せ，続いて共謀した一味が集まり，王を死刑にする相談をする。フェアファックスはクロンウェルの野心をあばき，王の死刑に反対する。けれども，クロンウェルの巧みな弁舌に抑えられ，王の死刑は決定されてしまう。

すると，その場に姿をかくしていた王妃は，すべてを聴いて絶望のあまりとびだし，かえってクロンウェル一派につかまり，王ともども監禁される。

舞台がかわり，王妃は王を連れに来たクロンウェルを激しく罵倒するが，彼を愛している王はむしろクロンウェルを弁護する。

彼等が去り，王妃ひとり残されたとき，ストラトフォードが現われ，地方で決起した王党派がクロンウェルの息子たちをとらえたから，王は救助されるでしょうと王妃に告げる。

かくてクロンウェルは窮地にたつが，王が彼の息子たちを釈放するように命じたことを知ってほっとする。この事実を知ったストラトフォードはすべてが終わったことを見抜く。第四幕から第五幕へと彼の見抜いた如く展開し，王に続いて王妃も犠牲にされ，最後にストラトフォードのラシーヌ張りの語りで幕となる。

以上がバルザックの『クロンウェル』であるが，彼は生涯で始めてこれだけの劇作をものにし，自己の才能に自信を持ったとしても不思議ではない。詳しくは後述するけれども完成した彼の作品を読んだ専門家は，誰もが駄作とみなしたが，当人だけはこうした批評が見当はずれであると確信していたのである。

バルザックは作品をどうにか完成したことで，自己の才能を予感した筈であるが，われわれ他者には本人の予感した部分までは見えない。それゆえ，こうした齟齬は，バルザックばかりでなく，通常，天才が絶対に越える必要のある

障害なのかも知れない。

1820年の初頭，バルザックは『クロンウェル』を完成したわけではないが，一度，ヴィルパリジの家族のもとに帰ったと推測されている。パリの屋根裏でどんなに切りつめた籠城生活をしていたとしても，手持の生活資金が底をつき，両親に無心するために戻ったのであろう。

この時期，バルザックの父は慣れない田舎生活に不満をもらす妻や，老いの身のつらさを愚痴る義母を敬遠するためか，かねてから念願していた長寿法の研究に没頭し，日々の生活を心配ごとなく楽しく送ることが長命への道だと悟ったらしかった。もっとも，彼の研究テーマに不慮の事故という項目がなかったせいか，事故による死を迎える破目になってしまうのだが。

バルザックが実家に帰ったとき，家庭はこのような雰囲気になってしまっていたから，若い彼には大人たちの話相手になることは真っ平御免の心境だった。それもそのはずで，大人たちの話ときたら，自然息子オノレに対する叱言となる。バルザックがお金の無心に戻ったことがわかっていたから，両親が彼に愛想のいい顔を見せるなどということは，金輪際なかったのである。それに娘たちの結婚を考えてやらねばならなくなっていた。それには少なくとも数万フランの持参金を用意しておく必要があったのである。

そこで，彼は親たちと顔をあわせるのを嫌い，もっぱら，ふたりの妹たちの相手をしていた。すると，退屈が支配しているこの家にも久しぶりに陽気な笑い声が響く。彼が妹たちを笑わせるなにか面白い話をしたり，仕草をしたりしているのにちがいない。そんな妹たちも，ある青年が姿を見せると兄をひとりにしてしまう。

この青年はやがてバルザックの義弟となるウジェーヌ・シュルヴィルで，理工科学校の出身でありながら軍隊に入らず，土木技術者となり，近くのルウルク運河計画のためにこの地方に赴任していた。

シュルヴィルは1790年6月5日にルッアンで生れているから，1799年生れのバルザックより9歳年上だった。それで，どんな縁からかわれわれにもよくわ

かっていないが，バルザック家に出入りし，丁度，結婚適齢期にあるロールに好意をいだいたようだった。それで，休日ごとにバルザック家に来ていたのだ。バルザックもそうしたシュルヴィルの態度に多分なにかを感じたであろうが，彼にはパリの屋根裏でまだしばらくはつきあわなければならない『クロンウェル』が待っていた。

作家の分身であるラファエルはその屋根裏の様子をわれわれに次の如く語っている。

《ものを書くときに使っている粗末な仕事机，それのおおいにしてある褐色の羊の革，ピアノ，寝台，肱掛椅子，あやしげな模様の壁紙，家財道具と，あらゆるものに一様に生気が吹きこまれて，僕のつつましい友人ともなり，僕の未来のもの言わぬ加担者ともなってくれるのだった。》(T. S)

だが，バルザックは実生活では，もう少し贅沢をしていたらしく，壁紙はラファエルに回想させているようなあやしげなものではなく，引越したときに新品の白い壁紙で小ぎれいに張りかえたし，版画と鏡でごちゃごちゃと飾っていたと伝えられているが，彼の母は息子オノレのそうした浪費を幾度も厳しく戒めた。われわれが臆測するに，バルザックもだんだん花の都パリの魅力に毒されたとみえて，金遣いが次第にあらくなっていったのであろう。

1820年のある日，バルザックは『クロンウェル』を遂に完成させて有頂点になった。彼が酒を飲める体質なら乾杯したい心境だったであろう。バルザックは酒もたばこも生涯飲まなかったと伝えられている。

折も折，ロールがウジェーヌ・シュルヴィルと5月18日に結婚式をあげるという便りがすでにヴィルパリジから彼のもとに届いていた。矢張りロールは彼と結婚するのか。

そこで，バルザックは完成したばかりの原稿を喜びにひたりながら家に持ち帰り，両親に見せたのであるが，人前に出せるような代物ではなかったので，バルザックの母は清書の労をとったという。

彼女は夫と同じく息子オノレが作家になることには心から反対であったとし

ても，バルザックが蒼白い顔色になり疲労困憊している姿を眺めてはさすがに清書しなさいと言いかねたのであろう。それにもし病気にでもなられようものなら大金がいる。仕方がない，私が清書してあげるよ。事実，バルザックはすっかり痩せこけて半病人だった。

それで，彼は母が人前に出しても恥ずかしくないようにきれいに写してくれた『クロンウェル』を身内の者や家の親しい知人たちが集った席で，ともかく朗読してみることになった。

バルザック家のサロンに集合した顔ぶれは両親を始め，ふたりの妹，ロールのフィアンセであるシュルヴィル，あの親切なダブラン，それに家族の知人である医者のナカール氏などであったと言われている。ところが，バルザックが精魂こめて朗読を始めても，彼が期待したような感動を誰も示さず，それどころか関係のないことを私語する者が出る始末に，彼は朗読の半ばですでに惨めな気持ちにおそわれたらしい。

シュルヴィルはもうすぐ義兄となるバルザックがあまりにも悄然としている様子を眺めて，ロールを前にしていっそう点をかせぎたかったのか，それとも心から気の毒に思ったのか，理工科学校時代の恩師であるアンドリュウ氏に，『クロンウェル』の批評を仰ぐことにしてはと人々に提案した。

バルザックの父は自身が作家の真似事を気の向くままに試みるもの好きでもあったから，誰かその道の専門家に息子オノレの審判者になって貰う必要を大いに認め，我が家のほどなく婿殿になるシュルヴィルの提案に異論のあろうはずはなく，内心彼の道理のある考え方に感心して，娘ロールもこの男とならきっと幸せになると喜んでいたという。

バルザックが苦心をかさねて創作した『クロンウェル』の決定的な判決はこうしたなりゆきから一時延期されることになった。

アンドリュウ氏は『暢気な粉ひき』の作者として，世間に少しは知られた人物であったけれども，ほどなくかつての教え子であるシュルヴィルのもとに辛辣な返事を送ってきた。先生の判定によると，

《「この若者は文学にはまったく向いていないから，他の仕事に就職させるべきです。そうすることが本人のためである。」》(K)

という内容であったという。

さらに，こうした厳しい判定を下したのは，このアンドリュウ氏ばかりではなく，演劇通を自称するダブランはテアトル・フランセの知人であるペパン・ルアルール氏に意見を求めたが，その道のベテランの判定も，アンドリュウ氏のそれと大同小異であったと言われている。もっともダブランがバルザックの『クロンウェル』の判定を求めたのはペパン・ルアルール氏ではなくて，コメディ・フランセーズの正座員であったラフォンであるという研究者もいる。ピエール・バルベリスもそのひとりであるが，ラフォンも『クロンウェル』に良い評価を与えなかったという。

後年，バルザックはフランス文壇で名声を得た際，彼の自伝的小説のひとつである『あら皮』で，これらの審判者たちに厳しい復讐をしてのけている。バルザックの『クロンウェル』は，われわれが紹介してきた如く，事実は喜劇でなく悲劇だったのだが。彼は分身のラファエルに自己を認めてくれる具眼者のいなかったことを無念そうに回想させている。

《これよりさき，僕はふたつの大作を計画していた。ひとつの喜劇の方は日ならずして僕を有名にし，僕に財産を与え，僕が天才の主権をふりかざしつつ，ふたたび待望の世界に立ちもどる機縁ともなるはずの作品だった。ところが諸君はこの傑作に，学校を出たての青年がおかす大きな誤算，児戯に類するばからしさしか見ようとしなかった。》(T. S)

われわれはすでに先にも分身とみられる作中人物に，作家を語らせる言わば帰納的方法を幾度も使用したが，このことは作品が作家本人よりも雄弁に作家自身を告白しているとすれば，その作品の主人公である彼の分身は他の作中人物より以上に作家の本音を告白していると，ときには言えるのではあるまいか。

バルザックは自称傑作こそ誰からも賞讃されない不運をみたものの，神がまったく彼を見捨てたわけではなかった。ふたつの幸運が落胆している彼を慰め

たのである。

そのひとつは，彼がその年に入隊するはずだった兵役義務から免れることができたこと。

そのふたつは，処女作とも言える『クロンウェル』では作家としての能力さえも否定されるひどいめにあったけれども，依然パリに留まり，ともかく当分は作家修業を続ける許可を両親から得たことである。

それに，バルザックが『クロンウェル』を創作したことは彼にとっては貴重な体験となった。直接には韻文でものを書く才能がないという事実を彼は不承不承であるにせよ悟らざるをえなかったし，間接的には，彼がやがて次々と創作することになる小説にその体験がなんらかの形で役立っていったからである。だから，具眼者がいなかったのではなく，彼自身が具眼者であったのである。

従って，バルザックが次に創作するジャンルは限定される。それは小説以外にない。

『クロンウェル』の失敗後，彼自身もそこに目を向けるが，いずれにしても，『小説家バルザック』の著者であるモーリス・バルデッシュがわれわれに示唆している如く，この1820年はバルザックの作家活動の開始期でもあった。

この時期のフランス文学は混沌としており，殆ど後世に残るような傑作などはなかった。それもむりのないことで，フランスではわれわれがみてきたように，前世紀末から政情がまったく不安定であり，人々はとかく静かな余裕のある生活を忘れてしまっていたのである。今日を生きることが問題の時代であり，刹那主義が流行していたとみてよい。

だから，人々が落着いた雰囲気で文学作品をひもとき，時間をかけて考える悠長な読み方はすでになく，その結果，場あたり的な通俗きわまりない，グロテスクな小説が幅をきかしていたのである。ただ，スタール夫人やシャトーブリアンに僅かな例外を見るだけだった。それゆえ，当時のフランス文壇で流行していた作家たちは今日ではかなり詳しい文学史にのみその名を記載されてい

るにすぎないピゴール・ルブラン，デュクレイ・デュミニル，ピゼレクゥルなどであった。むしろ，フランスの作家たち以上にイギリスの作家たちの小説がさかんに仏訳されて読まれていた。すなわち，アン・ラッドクリフ，グレゴリィ・ルイス，マチュラン，ウォルター・スコットなどの作品である。このなかで，スコットの世界はいささか他の作家たちとは異なっていたことは確かである。

それにしても，これらのフランス，イギリスの作家たちがいわゆるロマン・ヌワール，ロマン・ゲェイ，メロドラマといった小説を創作しており，ロマン・ヌワールの舞台は城であり，要塞である。悲劇のヒロインも保護者も悪人も皆そこに集まる。一方，ロマン・ゲェイの作中人物は主人公がスターではなく，むしろ，メロドラマがあまり重要視しなかった脇役が主役扱いされる。だが，これらの小説はひと言で言えば今日皆死んでいる。それら自身の力では復活することは殆どありえないであろうが，これらの三文小説はそれでも鳶が鷹を生む役割を果すのである。

先ず，最初に孵化したのが，バイロンの出現によって詩作を断念したと言われるウォルター・スコットである。そして，英仏海峡を越えてフランスの土地で孵化し，兄貴分のスコットを見習ったのはヴィニー，メリメ，ユゴー，大デュマなどであり，われわれの主人公バルザックである。

というのも，スコット小説には明らかにロマン・ヌワールなどの影響が読みとれる。それはロマン・ヌワールの保護者が女主人公に対する如く，スコット小説のボヘミアン，小人，魔女，親切なおどけ者たちが，女主人公に保護的な役割を担って登場しているからである。

それゆえ，小説を執筆する決心をかためたバルザックの手本となる作品は始めのうちは以上のような作家たちの三文小説にほかならなかった。そして，バルザックは自身が創作にとりかかる前にこれらの小説を多読したことであろう。

バルザックが生涯で始めて本格的に小説を創作する決意で執筆した作品は，

哲学小説と言われた『ステニ』であるが，この作品を彼が執筆した時期は1821年の初頭とみられている。

この小説の原稿は，今日，ロヴァンジュールのコレクションに保存されているが，小説の梗概は以下の如くである。主人公ジャコブ・デル・リエスが少年時代の女性に愛をいだいていたことが，物語の発端となる。その女性は作品の題名となっているステニで，彼女の結婚式が近づいた頃のある日，彼は彼女と再会する。ステニの結婚を知ったデル・リエスはその結婚を妨害しようと企てるものの失敗する。しかしながら，ステニもデル・リエスを愛しているところから，小説は情念の物語となり，彼女の夫は妻の愛人であるデル・リエスと決闘せざるをえなくなるという粗筋である。

次にバルザックがこの小説の創作に際して，どのような小説技法を使用しているかについては少しばかりわれわれもモーリス・バルデッシュに習って研究しておこう。

バルザックが主人公デル・リエスに対して意識的に自己投影しているという見地から，デル・リエスは後年の作品の主人公ルイ・ランベールなどにたいへん類似した人物として創造されているけれども，デル・リエスは，勿論，現実の作家像ではなく，作家がそうありたいと願う理想の人物像として創造されていることは言うまでもない。

言わば，人形に自己の長所のみを与えて完成した人物像であるとしても，われわれ研究者がそれにもかかわらず注目に価すると判断するのは，デル・リエスが作家バルザックの臍の緒をはなれていない作中人物だからであり，『あら皮』や『谷間の百合』や『ルイ・ランベール』などの主人公たちが，このデル・リエスと兄弟となることである。

実はそこにわれわれはバルザックという小説家がこもる秘密の創作部屋にこっそり入る鍵のひとつを見つける。

一方，ヒロインであるステニは帝国時代の文学が創作したモデルの枠から殆どはずれていない作中人物とみられ，コッタン夫人が描写したヒロインたちの

如く，火のような魂を持っている。

さらに，モーリス・バルデッシュがその著作『小説家バルザック』のなかで指摘していることであるが，デル・リエスとステニがたがいに本心を告白しあい，絡みあう小説の筋立は，バルザックが『クロンウェル』を執筆した経験が確かに役立っていると言い，続けて，モーリス・バルデッシュはステニの夫にふれて，彼が金持の彼女と結婚することで政界に進出する野心をいだく描写に注目し，ここにすでにバルザック小説の特色がみられるとわれわれに示唆している。

次に『ステニ』に続く小説であるが，バルザックは1820年の7月頃に新しい主題を着想していたようである。それが『ファルチュルヌ』となる。しかし，この小説は1816年や1823年に執筆された同じ題名の小説とはまったく別個の作品である。

この第二の『ファルチュルヌ』はノルマンの騎士たちによるナポリ王国の征服を主題として扱っているが，現存する原稿は2片の断章しかないと言われている。

小説の梗概は，ナポリの支配者ボルヂノが，サラセンの侵入やフランス人の陰謀から領地を守ろうとして，決戦を準備していた時期に，皇帝から増援軍と共にふたりの囚人が送られてきた。そのひとりが小説の題ともなっている美女のファルチュルヌであり，別のひとりは青年であるが，皇帝は両名が到着したら，即座に死刑にせよとボルヂノに命じていた。

そこで，ボルヂノは囚人に犯した罪科を糺すが，ファルチュルヌは意外な生立ちを彼に語り始める。彼女は偉大な科学の神秘を伝授された老司祭のもとで育ったと言い，その老司祭は死の直前に俗人には未知なる自然の秘密を体得していたとも伝える。ボルヂノはこうした啓示を聞かされて非常に不安をいだくが，皇帝の命令は実行しなければなるまいと決心する。

この場の話を，ボルヂノの娘サンベリーヌが偶然知ってしまう。父と同じく，彼女も不安にかられ，夜のうちに囚人たちを助けるべく，宮殿をさまよ

い，機会を狙っていたが，囚人たちを逃亡させることに失敗する。けれども，ふたりの囚人が超自然の力に導かれて，説明のできない方法で姿を消した事実を知り，その場で失神する。

ほどなく，サンベリーヌ自身が超自然の力で，宮殿からはるか遠く離れた恋人のかたわらに運ばれている。そこへファルチュルヌが瞬時姿を見せ，ふたりに人間の力ではどうにもならないときには私を思いだしなさいと告げる。そして，時間がたつと彼女は宮殿で目を覚ます。

この小説の現存している原稿の第二の断章は，実は第四章にあたるものであり，第一の断章とはあらゆる点で異なっており，原稿紙の質も，書体も創作方法もかわってしまっているという。先のモーリス・バルデッシュはこのことについて，それにはロマン・ヌワールの痕跡が歴然としているばかりか，1820年にスコットの『アイヴァンホー』が仏訳されてフランスに紹介されたが，『ファルチュルヌ』のこの後半にはその模倣が認められると指摘し，さらにデュクレイ・デュミニルの創作方法も認められると述べている。

実は同年にバルザックが仲間と合作した小説である『ビラーグの女相続人』とか『ジャン・ルイ』にもこの小説と類似した創作方法が認められるのであるが，これらの小説については，後述することにして，その前にわれわれはバルザックがパリでどのような暮らしぶりをしていたのかをしばらく眺めたいと思う。

バルザックが少年時代を終わったばかりのこの時期にわれわれは彼の生活圏にひとりの老人を見出す。バルザックの一家がマレー街に住んでいた頃，隣人にボーマルシェの恋人だったという噂のあるルージュモン嬢が住んでいたが，彼女の友人に，われわれがこれから語ろうとしているヴィレル・ラ・フェがいた。彼はかなり世間に知られた人物でブールゴニュの出身で伯爵であった。

実は，彼は聖職者でもあったので，1782年から1790年にかけてアルトワ伯爵家の祈禱所の司祭を勤めたという。だが，聖職者にしては宗教心が稀薄だったので，大革命のあいだに俗人の生活に戻ると，イール・アダムの近くのノジァ

ン村に邸を買って隠退するつもりでいた。そして，1815年，王政復古の時代になると，その村の村長の職についた。彼は1822年に73歳で亡くなっているが，死の直前に村長の職を辞していたと伝えられている。

ヴィレル・ラ・フェはたいへんな資産家であり，前世紀の優雅な習慣を身につけ，貴婦人たちに対しては粋人として振舞う大革命前の王朝の雰囲気を漂わせていた。そして，役人生活の時代に彼は隣人たちと交際し，狩を楽しみ，チェスやトリックトラックに興じていた。その彼がなぜかバルザックをたいへん可愛がったのであるが，彼に実子がいなかったからであろうか。

バルザックは1817年の夏に始めてイール・アダムにヴィレル・ラ・フェを訪ねて数日滞在しているが，彼は1817年から1822年にかけて5度も老人を訪ねてノジァン村に行っている。そうした滞在で，フェリックスがモルソォフ氏からトリックトラックを習ったように彼もこの老人からそうした遊びを習ったのであろうか。とにかく，バルザックはまったく面白くもない公証人の見習や自ら望んだとはいえ，屋根裏部屋時代に一番気持よくときをすごせるのはこの老人宅に滞在しているあいだであった。それに多分御馳走が食べられるのが嬉しかったにちがいない。

それで，バルザックはイール・アダムを創作の霊感を与える天国だと呼んでいたと妹ロールは証言しているのであるが，事実，彼はイール・アダムを小説の背景として使用しているばかりか，ヴィレル・ラ・フェ老人そのひとを作中人物のモデルにしている。受勲者パミィエもそのひとりであるが，この作中人物は若者を教育することに楽しみをいだき，彼に女性の手管をあかしてみせたりする。さらに，『結婚の生理学』に登場するT侯爵は疑いなくこのヴィレル・ラ・フェ老人をモデルにしているとされている。このように，バルザックはこの老人から人生を学んだのであり，小説家を志ざす決心をしたとき，彼は大いにヴィレル・ラ・フェに感謝したことであろう。

実はこの時期にヴィレル・ラ・フェの他にバルザックにはいまひとりの老人がいた。この人物はマルゴーヌの義父でサヴァリーと言い，かつらを常用して

いる昔の騎兵士官であった。それで，バルザックに近衛騎兵というものが，どういうものであったかを話して聞かせたという。サヴァリーはヴーヴレ近くのラ・カーユリィに住んでいたが，バルザックは1820年と1823年に彼を訪ねて滞在し，小説の執筆に励んでいたという。しかしながら，その後，彼がこの老人を訪問した形跡はないようである。もっとも彼を訪ねなくなったかわりに，バルザックはマルゴーヌを訪ねるようになる。例えば，1825年の9月から10月にかけてサシェに隠退している彼の邸にバルザックは滞在している。われわれはマルゴーヌについては後述することにしたいと思っている。

さて，この時期，バルザックは彼同様作家となることを夢みているル・プワトヴァンなる人物を識る機会があった。当時，ル・プワトヴァンはバルザックもある期間真似た創作工場を持っていた。すなわち，彼は小説の構想を考え，助手に作品を完成させ，自己の署名で出版する狡猾なやり方をしていたという。すでにエティエンヌ・アラゴが彼のそうした助手の役をしていたけれども，彼はバルザックにも目をつけ，手伝わせようとしたらしい。こうした事情から，バルザックはル・プワトヴァンなどを通じて，小さな文学サークルを知ることになる。

一方，彼はパリでの生活に身内を持つことができて，心丈夫であり，また，楽しみもましたのである。というのは妹ロールが，夫シュルヴィルとパリの場末町であるサン・ドニ街に住居をかまえたことから，うるさい両親抜きの自由な生活があったからである。しかし，こうした生活はバルザックが願ったのにかかわらずながく続きはしなかった。1820年の暮，バルザックの母は息子オノレに親子が2年前にかわした契約が期限切れになってしまっている事実を知らせたからで，反抗するにしても兵糧攻にされては降参せざるをえなくなることはわかっていたから，ほどなくヴィルパリジの実家に戻らざるをえなくなった。田舎に帰った彼はかつてロールが使用していた部屋にこもり，創作に励む毎日を送ることになった。

バルザックがパリを去ったと丁度同じ頃にロールの夫シュルヴィルも仕事の

関係からベエイウに移住することになり，妹たちもパリを去った。

このように，バルザックは田舎に素直に戻りはしたが，ときどき，文学的な雰囲気の刺戟をもとめてか，上京することがあった。まだ，その時分，バルザック家はパリのマレー街に小さなアパルトマンを所有していたから，彼は泊る宿を捜す必要はなかったものの，ヴィルパリジからパリまでは20粁の道程があったが，文無しのバルザックはよく歩いてパリまで行ったという。それに彼はひそかに家から独立する計画をたてており，そのためにはかなりの資金が入用だったので，去年，知人となったル・プワトヴァンに頼みこみ，新聞，雑誌などの文芸欄で仕事をさせて貰うことになり，彼と共同で執筆したり，単独で執筆したりしていた。

ル・プワトヴァンは1792年生れであるが，喜劇役者レジクールの息子であったと伝えられ，バルザックが彼を識った時期にも文壇で認められるような彼の作品であると言えるものはなかったらしい。彼はバルザックを識る以前にエティエンヌ・アラゴを識っていたから，1820年に彼等３人がどのような動機で知人となったか明らかではないが，３人はともかく共同で小説を合作するようになる。そうした事情から，バルザックはル・プワトヴァンをヴィルパリジに招待したこともあったほど彼と親交を結んでいたようである。

われわれがみてきた如く，バルザック家では２番目の娘ローランスはまだ家にいたから，彼女は兄が紹介したル・プワトヴァンと親しくなり，やがて彼に愛情をいだくようになった。そこで，ローランスは彼との結婚を望んだが，兄と同じくこれといった定収入のない男との結婚を親が許す筈はなかった。

1821年になると，ル・プワトヴァン，エティエンヌ・アラゴ，バルザックの３人は共同で小説を執筆することになり，先ず，彼等が完成したのは，『ふたりのエクトール』と『シャルル・プワンテル』の２作である。しかしながら，これらの２作の小説の粗筋すらわれわれにはわかっていないようであるが，ただ『シャルル・プワンテル』は４巻本であるが，バルザックがそのうちの第一巻と第四巻とを執筆したことのみはわかっている。これらは著者名をヴィレル

グレと署名されて，2月と3月に出版されているが，この著者名はル・プワトヴァンの筆名である。これではアラゴやバルザックは面白くない。そこで次からはめいめい著者名を名のることにした。

そこで，3人は著者名をル・プワトヴァン・ド・レグルヴィルが，それまで通りの綴をもじって考えたヴィレルグレを，エティエンヌ・アラゴがドン・ラゴーという仮名を，バルザックがオノレの綴をもじってロール・ローヌとそれぞれ称することになったのである。

あけて，1822年の初頭に，やはりふたつの小説が彼等の3人ないし，ふたりの筆名で出版され，最初に『ビラーグの女相続人』が3者の共同執筆になるものとして，1822年1月のビブリオグラフィ・ド・ラ・フランスに報知されている。それから3ケ月後，『ジャン・ルイ』が同じくビブリオグラフィに『ビラーグの女相続人』の作者たちであるヴィレルグレとロール・ローヌとによって執筆されたと報知されている。これらの2作は彼等によって1821年の夏から秋にかけてすでに完成されていた小説だった。1821年の7月にバルザックはパリから出した妹ロール宛の手紙で『ビラーグの女相続人』について次の如く語っているのである。

《僕達の小説（『ビラーグの女相続人』）は出来上った。僕の受持ったのは後半だ。初版は600フランで売れると思う。君にも1冊送るが，他人に貸さないこと，そして傑作といって吹聴するという条件でなければ駄目だよ。今の状態では，僕には到底ベエイウへもトゥール地方へも行けそうにない。若し僕が家から出れば，僕には充分の研究と熱心さとが是非とも要る。小説を書いて稼がざるを得ないからね。》(W)

それから，われわれがこの手紙を読むと，バルザックはウォルター・スコットの『ケニルワース』を読んだらしく，妹ロールにこの小説は世界一の傑作だから是非読んでおくようにとすすめている。

われわれが次に取りあげる手紙もやはりパリから妹ロール宛に出されたものであるが，たとえ共著であったとはいえ，自分の執筆した小説が売れたことを

知らせ，さらに次の作品を執筆中であると告げている。

《『ビラーグの女相続人』が800フランで売れたので，僕は大へんうれしい。お母さんが買ってくれた程だからこの初版の売行は相当だろうと思う。ところがちょっと困ったことに，僕は身体の具合が悪く，咳がひっきりなしに出て弱っている。然し，僕は元気だ。それというのも，今僕達が書いている小説は恐らく1000フランで売れ今後52冊書けば1万2000フラン入って来る予定だ。》(W)

さて，文面に今執筆中の小説とあるのは多分『ジャン・ルイ』であろう。バルザックが『ビラーグの女相続人』や『ジャン・ルイ』でどの部分を実際に創作したのかがわれわれには問題となるのであるが，この謎ときをする鍵は上記の手紙やロヴァンジュールのコレクションにある。というのはコレクションについて言えば，前者の共同執筆に際して，バルザックが担当していたとみられる部分についての推測に役立つふたつの資料がそれに含まれているからである。

そこで，われわれはモーリス・バルデッシュの研究によってこれら2作の解説をしたい。

最初に『ビラーグの女相続人』についてであるが，先ず，モーリス・バルデッシュは第一の資料を研究した成果から，出版の際のタイトルから判断すると，全体のプランをエティエンヌ・アラゴが考案したとみるべきであるが，各章の削除とか，訂正の仕事ぶりからみる場合は，バルザックが具体的に考えたプランであるとみなすべきであるとしている。

その第二の資料は，バルザックの母が娘ロール宛の手紙のなかでこの小説について言及した一節である。実はこの手紙は1822年1月24日に執筆されたもので，例の如く，この母は息子オノレが執筆担当したと推測される部分に対してかなり厳しい批評ぶりを示している。例えば，ある文章は作者にも読者にも訳のわからないものであるとまで断言している。

問題の小説は，モルヴァン伯爵のひとり娘アルワーズが家の秘密を偶然見抜いた大罪人と結婚せざるをえなくなるというものである。この小説のテーマで

ある秘密，裏切者，強制結婚などの筋立から，この作品にはロマン・ヌワールなり，メロドラマなりが扱っている常套的手法が明白に認められるものの，一方ではそうしたジャンルの小説であるとは断定できないものを含むとみられている。

その理由はふたつある。すなわち，そのひとつは超自然的人物がこの作品においては不在であり，そのふたつは快活な作中人物の出現である。

そして，この小説『ビラーグの女相続人』は明らかに英国の女流作家であるアン・ラドクリフ小説の模倣であることは否定のできない事実であるとしても，当時，フランスでも次第に仏訳されて，次々と刊行され始めたウォルター・スコット小説の明瞭な影響も確認されるとされる。例えば，脇役にはスコット小説に登場するコミックな脇役と類似した作中人物が認められるという。すなわち，シャンクロスである。けれども具体的な痕跡となると，先のモーリス・バルデッシュは小説の外面に認められる程度であると限界を引いている。

ともあれ，この小説は全部で30章よりなるが，われわれ読者はこの小説のなかに作中人物のいわゆる主役を見出すことはできない。われわれの意図を見抜くと，数人の作中人物は主役として対等の権利を主張してゆずらないからである。

従って，舞台の主役の区別のないことは，われわれ読者にどうしても支離滅裂の印象をいだかせる結果になる。具体的には，作家はひとりの作中人物を描写し終わると，今度は他の作中人物を描写することになるが，それも前者の作中人物とのあいだに有機的な連絡がまったく読者であるわれわれに感じられない。さらに作家は創作技術の未熟さから，特定の人物ばかりに念を入れる。しかも，こうした作中人物のある者に対する作者の偏愛はこの小説にあっては終りまで続いている。このような創作上の欠点は共作のしからしむるところと言えなくもないが，先述したバルザックの母の批評はやはり正鵠を射ていたとみなければならない。

しかしながら，創作技術のある分野については，バルザックがこの小説を執

筆したことで，確実にある進歩をみせている。それはバルザックが1820年の小説ではまだ対話を上手にこなしていなかったのに，1821年のこの小説では対話を使用する技術を完全に習得していることである。この事実は，バルザックのみならず，彼の共同執筆者たちにしても，1820年に始まるスコット小説の花々しい成功に秘められた創作技術である対話に着目していたことを示唆しているとみるべきであろう。

ところで，われわれが特に注目したいのは，バルザックがこの作品で担当したと判断された文章にスコットの模倣が顕著であり，しかも，対話の描写技術にそれが確認されることである。もっとも，ウォルター・スコットのこうした影響はバルザックや彼の仲間に限らず，1820年代のフランスばかりか，ヨーロッパ各国の小説に眺められるものであることは言うまでもない。スコットのこうしたすさまじい影響は現代のわれわれには到底考えられないが，真実だったのである。あのスタンダールでさえ，1820年代にはスコットを高く評価し，作家たるものは彼を見習うべしと『ラシーヌとシェイクスピア』では書いている。もっとも10年たらずで，今度は真っ先にスコット小説には心理描写がないと言いだしたのもスタンダールであったが。

次に『ジャン・ルイ』についても，バルザックの小説作法を研究する意味で，われわれは共同作品という条件を念頭におきながらもやはりみておく必要があると考える。

この小説には『ビラーグの女相続人』にみられるロマン・ヌワールの持つ雰囲気は読みとれず，むしろ大革命前にパリで流行していたと言われるロマン・ゲェイが持っていた雰囲気が存在すると指摘されている。けれども，以下にわれわれが述べる理由は当然ではあるが，『ジャン・ルイ』は前作『ビラーグの女相続人』がそうであった如く，粗筋の展開にはやはりロマン・ヌワールの痕跡をとどめる。というのも，この小説は大詰でみせる創作方法から，カレー生れの作家ピゴール・ルブランの模倣作とみられるからである。

それに，これはロマン・ゲェイの明瞭な影響と判断されるのであるが，この

小説の作中人物は前作と比較すると，その数が少なくなっている。『ビラーグの女相続人』では主要な作中人物が6人ほど数えられたけれども，この『ジャン・ルイ』では対立するふたつのグループ，一方ではジャン・ルイが，他方ではヴァンドーユ公爵が代表するふたつのグループしか数えられないのである。それで，これらの対立するグループがこの小説では主役を演じてゆくことになり，登場人物の数からも，前の作品よりはこの小説の方が粗筋の展開はそれだけ明瞭になっている。しかも，『ジャン・ルイ』の作中人物は『ビラーグの女相続人』に登場する作中人物とは異なった性格に変貌していて，例えば，ヴァンドーユ公爵はメロドラマが扱っている裏切者たちとどこか類似した性格が認められるし，女主人公であるファンシエットもメロドラマに登場する優しい女主人公たちと瓜ふたつに創造されているのが認められ，また，一方では新顔も創造されていて，それがジャン・ルイであり，彼は『ビラーグの女相続人』におけるアルワーズの控え目な愛人とは比較にならないほど活動的な若者として描写されている。

しかし，この小説もル・プワトヴァンとの共同作品である以上，前作と同じく，バルザックがどの部分を担当執筆しているのかを正確に判断できる決定的資料は実のところ皆無と言ってよいが，それでもなお，『ジャン・ルイ』とピゴール・ルブラン小説とのあいだにある類似性は，バルザックが執筆しているせいであるとみなされている。それゆえ，バルザックが創作技術で，われわれが先述した対話手法の他になにを得たのかを検討してみたいと思う。

これら2作を比較検討してみると，後者『ジャン・ルイ』の場合には，柔軟さとか軽快さとかが読みとれるが，これは，作家が作中人物をあやつり人形として，もはや充分に彼の意図するままに演技させているところからくる読者であるわれわれの印象と言えるであろう。従って，作家が小説の展開のために必要と判断する場面で，作中人物を無理なく舞台に登場させ，彼が不必要と判断する場面で，作中人物をわれわれ読者に不自然さを感じさせることなく，やんわりと舞台から退場させる創作技術を習得したことになる。

バルザックはこれらの小説を執筆することで，創作技術の進歩を確かに示していることはわれわれがみてきた如く明らかであるが，彼自身はこれらの作品にいかなる評価を与えていたのであろうか。妹ロール宛の手紙でわれわれが読んだ如く本気で傑作であると信じていたのであろうか。実はバルザックの真意は逆である。彼は駄作を書き，僅かのお金を儲ける自分をひどく恥じている。1822年4月2日，妹ロール宛に出した手紙で自分の気持を正直に告白している。

《僕は『ビラーグ』を君に送らなかったが，これは実に非道いもので文学の糞だ。面紗がとられたからだ。僕は『ビラーグ』の値打ちをつくづく考えてみたが，自尊心が何もかもふきとばしてしまう。君が『ジャン・ルイ』を大事にしているのもよいが，ところどころに好ましい諧謔があるだけで唾棄すべきプランだ。嗚呼！　親愛なるロールよ，僕は僕が選んだこの幸福な職業の独立を毎日感謝している。文筆の道で金儲けが出来るとは今でも信じていることだが，今の僕は僕の力のほどを知っているのだ。僕の空想の花を馬鹿らしいことのために犠牲にしなければならぬのが残念だ。僕は頭のなかに何かを感じているのだが，若し僕が生活上の心配がなくて，おまんまが食べられたなら，僕はきっと立派な仕事が出来そうだ。然し，それには，現在のような環境から離れる必要がある。》(W)

だが，相変らず，バルザックはこれらの小説を共同で創作したばかりか，その後も，ル・プワトヴァンの筆名であったヴィレルグレと署名して誰かと共作したり，あるいは，単独で執筆して，一連の小説を出版して僅かばかりのお金を得ていたようである。これらの小説は1821年から1827年にかけて刊行されたものであるが，1836年にバルザックはこれらの小説をまとめて出版したことがある。しかし，このときの出版に際しても収録されなかったこれらの時期の作品もあるとみられる。

そして，これらの小説は，バルザックが創作に際してどのくらい執筆していたかは，われわれがみてきたように不明の点が多いが，いずれにせよ，彼が主

になって創作したことだけは事実であるから，これらの作品をまとめて解説しておくと，いわゆる，ヴィレルグレ小説は『ジャン・ルイ』まがいのもので，主要な作中人物の性格も殆ど似ており，その性格は情熱的でかなり冒険好きで，多くの主人公はブルジョワか民衆の出身者として創造されていた。一方，創作技術についても，モーリス・バルデッシュによると，ヴィレルグレ小説はバルザックにとって『ジャン・ルイ』を越えるものではなかったとみなし，そこにはバルザックの真の小説としての体験はなかったと断言している。

ともあれ，バルザックはこうした一連の仕事から，金銭的には両親に迷惑をかけなくなったとはいえ，相変らず，バルザックの母は息子オノレの文体を批判したり，彼の自惚をひどくからかったりしていた。彼はこうした母が恐ろしかったのか，身内の者になにかを語りかけたくなるときは，その相手として例の如く妹ロールをいつも選ぶのが習慣となっていた。

われわれが彼女宛の手紙から推測すると，バルザックは1821年の4月，5月とイール・アダムへ気分転換にでかけ，ヴィレル・ラ・フェ老の人生体験を聴いたり尋ねたり，ときにはトリックトラックをして楽しんでいたようである。もっとも，彼は翌年の5月にこの老人と永遠の別れをする。老人は鬼籍の人となったからで，その訃報を聞いた彼は人生の師を失った気がしたことであろう。小説家は誰よりも人間を識りたがる人種であるから，人生のベテランが身近にいてくれることは好都合のはずである。バルザックがこうした認識を持っていたかどうかわからないが，作家の道を歩む彼にとって人間を深く識ることは必須の条件でもある。バルザックは老人を失ったかわりに人生の師もかねた恋人をヴィルパリジで発見する。それがベルニー夫人である。

われわれはこの婦人については次の第三章で詳しく語ることになるのだが，バルザックにとって彼女がどんなひとであったのかを彼自身にプロローグとしてわれわれに紹介して貰うことにする。

1837年7月19日にバルザックはハンスカ夫人宛の手紙で，

《もし，小生が，1823年から1833年にかけてひとりの天使があの恐怖の戦い

で小生を支えていたということを語らなかったら，小生は甚だ正当ではないことになりましょう。B 夫人（ベルニー夫人）は，たとえ結婚してみえたとはいえ，小生にとっては神の如き存在であった。彼女は母であり，恋人であり，身内であり，友であり，助言者であった。彼女は作家を創造したし，若者をなぐさめたし，その若者の趣味を培ったし，恰も彼女は妹のように泣き笑いもした。夫人は毎日，有益な眠りが痛みを和らげるようにやってきた。》(K)

と，ベルニー夫人像を語っている。